
勿忘草

木の葉の影

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勿忘草

【Nコード】

N7616N

【作者名】

木の葉の影

【あらすじ】

世界がひとつの国によって統治されている時代。国民たちはまだ見ぬ地を目指し、冒険していた。そんな時、何故か記憶を失ってしまった少女ルイと臆病な少女ヘルンもギルド……。すなわち組織的な物に入り、晴れて冒険家となった。そんな時、各地で色が失われ、黒の世界となってしまう事件が発生する……。

0話 引き裂かれる者達

「走れ！ 走るんだ！」

「早くしないと……！」

「うぐっ！ お……お前だけは…… だけは行け！」

「躊躇うな！ 俺は大丈夫だから！ また逢えるから……！」

「この世界でまた逢おうな！」

「……必ずこの世界のあの地で……！」

夢の中で声が聞こえた。聞いたことのあるような声。

何故、あの声は私の名前を呼んでいるのだろう。知らない人のはずなのに……。

私は今、どこにいるのだろう。分からない。

声が言っていた「あの地」はどこにあるのだろう。

……っ！

頭が痛くなってきた。眩暈もする。

徐々に意識も遠のいてきた。

やばい……このままじゃ……

第1章 プロローグ

俺がこの世界に来て感動したことがある。

それは、色があること。

俺がいた世界ではあるのは黒。単色の世界だった。

それが普通だった。もうひとつ色とは言えないがあった。

それは光。色を持たない光もあった。

初めて見た色は黄緑。本で読んだ『草原』という所らしい。

とうとうこの世界に来ることができたのか。

その嬉しさよりも何倍も黒以外の色を見れたことが嬉しかった。

そして、空。あの世界では真っ黒の漆黒の空だったがこの空は違う。

水色をしている。その水色のキャンバスに白い雲が描かれていても美しかった。

この世界には水色を司る　　がいるのだな。

俺がいた世界ではとうの昔に　　の一族は皆、殺された。他の者の一族も皆、殺された。

色を司る一族が皆殺しされるとその色の宝玉は粉々になり消える。それと、その色の宝玉を盗むかでその色が世界から消えてしまう。その色が収めていた所に住んでいた者は消えはしないが、黒一色の世界……単色世界になってしまうのだ。

ただ、この世界はまだそれがどこにもない。ならば、それを防ぐべく俺は宝玉を奪う。

まずは……緑。緑系の色を司るローリエの所だな。

……そう言えば、　　は無事なのだろうか？

急に心配になってきた。兄としては当然のことだろう。

しかし……探すわけにはいかない。残された時間はあと少し。の助けがあつてこそ『過去』に来れたのだ。

邪魔が入り、ずいぶん時間が減らされたが……。

きつと、も宝玉を捜しに行っているに違いない。今は目先のこ
とだけを考えよう。

とは、あの地で逢えるはずだから。

今はローリエの所に行って宝玉を奪うことだけに集中しよう。

第1話 光り輝く砂の上（前書き）

やっと本編に移ります。

第1話 光り輝く砂の上

「え……そ……だ……」

聞いたことがない声が聞こえる。

「だ……だい……ぶ……」

何かに遮られて声が聞き取りづらい。

「だい……ぶ……です……か……」

だんだん遮られているものが消え、聞こえやすくなった。急に視界が黒から水色へと変わる。

「こっちは……？」

見たことのない空、そして、左目に包帯を巻いた少女が私の視界に入った。

「だ……大丈夫ですか……？」

少女が私に話しかける。とても拳動不審な女の子、それが私の貴女への対する第一印象だった。

「海岸へ来てみたら、えつと……君が倒れていて……」

そのっ……えつと……

言葉を詰まりながら話す少女が私を助けてくれたのか……。

「起きてほっとしましたぁ……」

「!?!」

胸をなでおろす少女の胸に手を当てている手が人の手じゃなかった。黒に近い紫色の手で、人の手の何倍もの大きさだった。

「貴女の……その手は……？」

おそろおそろ聞いてみる。

「はわっ！ えっと……この手は……その……手じゃないんです。
『羽』というものなんです……」

「『羽』……？」

「そうです。この世界には、その、神様の化身である、えっと……
10人の色を司るものがいて……その人たちだけに与えられた『羽』
を私はなぜか生まれたときから、うんと……あっ たんです」

『羽』……どこかでその言葉を聞いたことがある。

『はもしかしたら を司るものになれるかもね』

ズキッ

頭が痛い。そして、また聞いたことがあるような声。

「だ……大丈夫……？」

心配そうに私を見詰めてくる。そういえば少女の名前を知らない。

「そういえば、貴方の名前は？」

もっと早く知るべきだったかなと私は思った。名前も知らないで話続けるのは失礼過ぎたかも……

「わっ、私はヘルン。黒と黄色系を祀るアンダー族です。貴女は？」

「私は、ルイ。……あれ？ 私、何族だったかしら……」

自分の名前以外何も思い出せない。自分はどんな人間でどの色を祀っているのかも分からない。

「もっ、もしかして記憶喪失ですかっ！」

はわわわわっ

ヘルンは手と化した羽を口にあてる。

「分からないけど……そうかもしれないかも……」

「！！」

ヘルンが突然何かひらめく。

「だっ、だったら一緒にチームを組みませんか!？」

とっっても展開早くない？

喉まで出た言葉を必死で引っ込める。

確かに今は何も分からないし、もしかしたらそのうち記憶が戻るかもしれないから、ヘルンと一緒にいる方が何かと安全かもしれない。その後のことは記憶が戻ってきてから考えよう。

「……分かった。一緒にチームを組もう。よろしく! ヘルン」

ぱああああ

顔が見る見るうちに明るくなっていく。

「よろしくね! ルイ!」

ルイとヘルンの長い長い旅が始まるうとしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7616n/>

勿忘草

2011年10月7日23時03分発行